鍛冶文化の変容

― 言葉と生活 ―

富来　隆

一　はじめに

このところ、鍛冶文化にたいする関心がつよく、それに関連する言葉（地名）について、ずっと考えてきた。本稿もその一環であるが、本論に入る前に、すこし聞いていただきたい。

大分県の歴史を全般的に勉強し直そうと思ったのはじつは定年（昭和五六年）のときからであった。それ以前にも大分合同新聞社九〇周年記念に『大分県の歴史』全一〇巻が編集され、明治から現代まで（第八・九巻）を分担したが、これは現代史であって、いわゆる歴史時代ではない。私事で恐縮であるが、新制の大分大学教育学部に奉職し、戦後に新設の社会学科で、「社会学」と「社会思想史」の講義を担当してきた。学生（国史科）の時から、マックス・ウェーバーに心酔してきた私である。そういうことで、幸い社会学の担当が勤まった。まだ当初は農村が主力であったから、歴史知識も役に立った。そのうち都市が中心となりだしてから新しい勉強に追いかけられたが、中学生時代から数学が好きだったから各種の統計やグラフには関心がつよかった。さらに後年になると、社会学に民族学や人類学の分野が広がり、これはもう、追いつくのに精一ぱいであった。地方での独学に近い有様で、苦しい年月がつづいた。

たまたま定年の年昭和五六年度から、全国的に、大学の一般教育に、各県の歴史が開講されることになった。大分大学でも、「大分県の歴史」（三学部共同）が科目として始められ、丁度そのとき一般教育のお世話をしてい

た関係上、私も分担することになり、久しぶりに歴史学に復活した気分になった。

そのことが、私なりに、というよりも私流に、いま現在の時点から、豊国の歴史を見直してみたいと考えた。厚かましいと言われそうだが、誤解もされるかも知れないが、そんな大それたことではなくて、私としては六〇の手習いのつもりで、自分への挑戦であった。

当然のことではあるが、まず原典にあたって、始めから自分の眼でよみ直すこと。分らない時は、すぐ図書館に出かけること、にした。なかなか忙しかった。

原典にあたるだけでなく、現地にも出かけて、当時の地形や風景、また交通などを思い、何故か（ナゼ）、を考える連想ごっこに努めもした。

第二の難点は、古代の人名や地名・件名などで、意味が分らないモノのことであった。その疑問をとくカギの一つに、朝鮮語によるものがある。たとえば、山国川の青ノ洞門のすぐ下流に、「牛ノ首」という地名があり、これは Small neck（小さい隘路）という意味になる。というわけで、朝鮮語を新しく勉強するのには少しく年をとりすぎて、記憶がつづかない。だから、同じことを何度も辞書をひいた。類音の語を考えるときは片ッ端からさがしたりもした。先学を煩わし、厚かましく迷惑をかけながら、御指教をお願いした。

「豊国」の名の意味について、昭和五九年の『豊日史学』にのせてもらったが、いちおう『日本書紀』・『古事記』などの、朝鮮語による理解はすすんだが、『豊後風土記』には手がつかなかった。その後昭和六二年に、古稀記念集をつくる段になって、さらに『日本霊異記』上巻第五の、三宝信教の段における「異国の仏像を、豊国にすて流さしむ」とする豊国のことも考え合わせようと思った。これを『風土記』の一文とも合わせて無矛盾的に（合理的に）解決できないかと苦しみ考えた。

そのことから、「芋」の字を、「芋」の字の誤りとされるならば—ウバネ・カンボウといわれ、下のところがハネルか、まっすぐボウになっているか、それだけの違いである—「芋」は蓮のこととなり、「蓮華化生」の語から、豊国とは仏教王国のこととしてスヂが通ることになると

思った。だが、国分先生から御叱教をうけ、軽々に、文字を訂正すべきでないと深く反省し、もう一度、勉強し直すこととした。書紀・古事記と同じように風土記を、朝鮮語の媒介での読解はできないものだろうか。

「大分の朝鮮文化を守る会」の吉川敬三郎氏から、氏の半島での体験と知識とからの、大変な助言をいただいた。有りがたかった。

日本語では、ヤム芋がヤマ芋になり、タロ芋がサト芋になった。朝鮮語ではサト芋は(thoran)というのが正しい、ということ。そして、鉱山を「見立てる」のを(thorok) という。だから、トラ（ン）とトロ（ク）とは、類音として成立しょう、とのことであった。祖母山の南（宮崎県側）に、見立鉱山と土呂久鉱山とがある。国東半島東南の奈多八幡の本山が、見立山である。このことも考えられる。

風土記の「冬に、芋の、花が咲く」という字義は、

冬は(tong)で、全く同じ語で、「銅」である。

花が咲くは(phida)で、同じ語で、「穴を掘る」という意味にもなる。

芋（サト芋）が「見立てる」と類音になる。

これによると、「冬に、芋の、花が咲く」とは、すなわち「銅の、鉱山を見立てて、掘る」という意味になるのである。類音のパズルだ。

これこそ、本当の朝鮮語による理解だ、と痛感した。うれしくて、涙が出る思い（飛びあがる思い）だった。これで本当に解けた—平成元年に『大分県地方史』と『東アジアの古代文化』に、のせてもらった。

「豊国」とは、農業国でもなく、仏教王国でもなく、鉱産国—当時の、鉱工業の先進地域、という意味なのであった。祖母山の神が、対馬の最北端の「豊村」に祀られているナゾも、これで半分とけた思いである。

豁然として、目のさめる思いであった。そしてまた、学問の道の、遠くて、険しい事を、思い知らされた。

前号まで、何回か「言葉」の文化（歴史社会学の道）を述べてきたし、本稿もそのつづきであるが、すでにお気付きのように、これは、歴史学というよりも、比較社会学の立場からの接近である。今回もまた、そのつもりで読んで頂ければ幸いである。

正確な年代は分らなくても、先人たちの生活の知恵が文化として残されてきた道を、私も辿ってみたい。

二　二つの地名表

明治一五年八月付の『大分県各町村　字小名取調書』（『大分県地名大辞典』また『明治前期地誌資料』も、それによっている）によってみると、大略つぎのようになる。

浜脇村　（峯田、吉備山、裏田、鍋、柳、鳥越、平原・穴守…隠山、赤松ほか）

それより古い地名表をのせた『別府市誌』（昭和六〇年刊）の付表に記された地名の、タタラ、穴守、ウト（洞）、登り立、井手ノ口、山ミコ、隠山などのうちで、わずかに穴守と隠山とがのこされるにとどまっている。

鉄輪村　タタラ、風穴、宇土山、水落シ、すべて消えてしまっている。

鶴見村　タタラ、ツヅラも、なくなっている。

野田村　タタラ、ドウ山も消え、辛うじて千引がのこっている。

天間村　スナ畑、荒金、鉱地、登り立は全滅してしまっている。（本紙六号、参照）

これら行政的な地名の変更は全国的で、別府にかぎったことではないが、とくに鍛冶（カジ）文化に関しての消失は、まことに大きなものがある。

この夏、まる二日ほど、宇佐平野、安心院盆地を走りまわったが、タタラ地名はわずかに二ケ所で、タタラと登り立の地名があった。この登り立が、どういう地形かを、他の地区とも見てまわったが、滄桑の変というか、まったく昔の姿は分らない状況にあって、慨歎するのみだった。

何故か。それを問うまえに、せめて古い地名をのこしてくれた史誌に感謝するほかはない。それさえも、何時までさかのぼるかは、分らないのが実情である。

その地に祀られた神々には鍛冶に関係するものが多い。八幡神は、『託宣集』にも「鍛冶ノ翁」と現われたのち、「八頭の大蛇神」となり「金色の鷹」と化した。熊野神も『神道集』にみられるように、鋳物師（イモジ）の神

とされている。スサノヲの神（八坂神社）は、鍛冶師の祖神とされており、ホノカグツチの神（火之軻遇土神）は、秋葉神社とし―カグは朝鮮語 Kwang（鉱）の音写―さらに鶴見岳の神（ホノヲ・ホノメ）は、火男・火女であり、火の神すなわち鍛冶の神）である。

数多くの「鍛冶の神々」が坐ます。しかし、その祭祀年代が定かでないものが多い。地名のタタラ・カジなどと、どう結びつくのか分らない。はっきりした年代を示す古文献（記録や文書）が無いばあい、どのようにして歴史的な時代の決定にせまることが出来るのだろうか。

〝むかし、むかし〟では、オトギバナシと同じになってしまうが、やはり、地名がのこされているからには、何とか実状にせまりたいものである。

地名は、時代によって変化し（増えたり、減ったりする）、また地域によって差異がある。時代で分らなければ近くの地域との比較によって考えるのも一方法ではあるまいか。とは云うものの、何処と比べたらよいのか、それを撰ぶのが一つの問題である。やんぬる哉。

もう一つ別の、迂回的接近として、前にタタラ文化を調べたとき（本紙六号）抜キ書キした鍛冶関係の地名を一覧表にして、それを再構成してみる工夫は成り立たないものだろうか。これを考えてみたい。

問題はまったく違うが、レビィ＝ストロースの『構造人類学』に、神話の再構成の試みがある。

レビィ＝ストロースの評判はあまりに高く、その難解ぶりもまた定評がある。昭和六〇年二月から四月まで、近くの安永病院に入院していたとき、たまたま同書を入手して読むチャンスがあった。精神集中ができたから、そのときは理解も進んだつもりだった。退院してから、もう一度ひらいて、分らないところだらけになった。だが目次だけをみれば、取っつき易くも思える。

『構造人類学』　目次

第一章　歴史学と民族学、（以下）言語と親族（二～五章）、社会組織（六～八章）、呪術と宗教（九～十二章）、芸術（十三、十四章）、方法と教育の問題（十五～十七章）である。

その第三章「言語と社会」のうちにこう言っている。

「言語は一つの社会現象である。あらゆる社会現象の中で、科学的研究に手がかりを与える二つの根本的性格をもっとも明らかに示しているのは言語である。」

そして第十一章「神話の構造」のなかで、言う。

神話は、「昔々というふうに、いつも過去の出来事にかかわる。しかし神話に帰される固有の価値は、ある時点において展開するものとされるそれらの出来事が、恒常的な構造をもなすことからくる。この構造は、同時に過去、現在、未来にかかわるのである。この根本的な両義性を明確にするには、ある比較が役立つだろう。政治的イデオロギーくらい神話的思考に似ているものはない。現代のわれわれの社会では、たぶん前者が後者にとって変わっただけであろう。」（P二三二）

ストロースの、この言葉。「比較」という方法での、神話と政治とが（その思考において）よく似ていると指摘するのである。思いがけない比較であるが、言われてみれば成程そういうものか、と分るようにも思える。

ストロースは、それにつづいて、神話の構造を、オディプス神話を例として、その「断片的な後代の編述を通して」「神話素の種々な配列」を「表として示す」ことで、その操作によって、神話の構造法則にたっすることができるとしている。

					7	8
				6		8
					7	8
			5		7	8
			5			8
		4				8
		4				8
	3					8
	2					8
	2					8
1						8
1						8
		3	4	5	6	

オテイプス神話素の配列表

まず神話素の配列表をうつしておく。いま問題にする鍛冶の地名と、上にかかげた「神話素の種々な配列表」とは、その内容においてまったく異なるけれども、同じく文化の問題として、ともに断片的にのこる素材としてみることができる。それゆえ、問題理解の、一つの手段として応用するのは、有効ではあろう、との予測が成り立つ。そういう観点から、あえて地名の配列表を作ってみた。（次頁）

ここで気がついたのは、カジ（鍛冶・梶・千疋など）と、それに関連ありと思われる地形・工作の、①穴守・土穴・風穴、②ウト・ホキ（ともに洞の字をあてる）、③井手・水落シ、などの地名がよく残っていること。また、タタラに、登り立が伴っていること。そのかわりに、

タタラ地名要素の配列表

	1	2	3	4	5	6	7	8	
(1)浜脇	タタラ		隠山	穴守	ウト 登り立	(ツツラ)	井手口	山ノ神 年ノ神	金ピラ山 山ミコ
内成		梶原	同免						
(2)鶴見	タタラ					ツツラ	井尻	年ノ神	山王
北石垣		梶田 鍛冶屋					井手 井尻		
南石垣		千疋		土穴				山ノ神 年ノ神	牛頭
(3)鉄輪	タタラ	梶原		風穴	ウト山		井手 水落		
亀川			隠迫 同免		ホキノ元		水落	庚申	
(4)野田	タタラ	千疋	銅山						
内竈		釿ノ掛 梶久	銅免	穴田	ウト田		水落	金ピラ山	
天間			砂畑 鉱池		登り立	(ツヅラ)			

(※3と5とには問題がのこっている)

↓

地名構成表

(1)浜脇	1		3	4	5		7	8
内成		2	3			(6)		
(2)鶴見	1					6	7	8
北石垣		2						
南石垣		2		4			7	8
(3)鉄輪	1	2		4	5		7	
亀川			3		5		7	8
(4)野田	1	2	3					8
内竈		2	3	4	5		7	
天間			3		5	(6)		

(※これによって、全体の構想が復原可能になろう)

カネ(金)のつく地名が見当らない。銅山・銅免などの文字は見えるのに、「金屋」などが見られないのは、どうしたわけであろうか。これが別府の特色なのであろうか。もう少し調べてみる必要があろう。

別府の地名表だけでは判断しにくい。ことに全国的に明治初期にタタラの火は大部分が消えた、といわれる。それだけに民俗的にも聞き書きの作りようがない。ただ地名の位置から判断すると、タタラのそばにツヅラ(葛

篭原）がのこっている。鶴見では並んでいる。浜脇では峠の南の米山に存する。天間では西の萱篭にみえる。そういう工合に、運搬道具の必要が、近くにツヅラ原を作らせていたことが分る。それならば、同じ地名としての登り立はどうなのか。おそらく単なる地形名詞ではなくて、「海から吹いてくる風を、炉内へ入れて鉄をふいた」といわれ、そういう簡単な野ダタラの仕組み、すなわち風をたてる仕組みを、登り立と云ったのかもしれない（『和鋼風土記』より）。そう考えると、スヂミチがつくように思われる。

宇佐平野では、別府とちがって、鐵よりも銅の精練がつよかった。八幡神とそれにまつわる佛寺の信仰とが、それを必要としたからであろう。宇佐神宮の東西にカラの地名がのこる。西は、駅館川をこえての西岸に、辛島（カラシマ）の集落がある。その周囲に、四日市から城井に加賀の地が二つ。上田から荒木に碇（イカリ）の地が二つ。さらに乙女から西高家に曲（マガリ）の地名が二つある。一つは曲り竿（サヲ）という面白い地名であるが、朝鮮語で解すると、「銅の鍛冶」をしやれたようである。カリは、Kuri（銅）の音写であり、カガは、Kwang（鉱）の音写である。天ノ香具山、国東の香々地、そして別府天間の「鉱地」がある。

つぎに、宇佐神宮の東に、寄藻川沿いに橋津の地に加羅平（カラ）がある。西の辛島に対するカラの地。いままで誰も注意してないが、ここも銅の地名が多い。日足には銅、鉾ノ尾、金屋、鍛冶屋もある。和気には千疋の地名を発見した。別府の南石垣と、野口とに、同じ地名があるだけに嬉しかった。川東には、西木（サイ）や苅宇田（カリ・ウタ）などの地名が、目をみはらせるものがある。別府にも、鶴見のタタラの南に、南立石に尾曲（マガリ）があり、北の鉄輪にウカリユ（イカリの転『別府温泉史』には、怒（イカリ）の湯、と見える）がある。内竈の狩落（カリ）もあるいはと思わせる。近くにカジ関係の地名がある。カジと云えば、両地のカジ地域に共通して、白鳥の飛翔がみられる。そこで、再び迂回して、以下これについて考えてみたい。

三　白鳥の南下

白鳥は、風の神であり、鍛冶の神でもあった。

天ノ鳥船というごとく、海人族の神でもあった。

かくて、現実の「白鳥」（鶴や白サギなど）と、思考上（神話や民俗）の白鳥信仰とが交錯する。各地にみる白鳥神社の存在は、このような生活と文化の接点を示しているのではないのか。

たとい無駄骨になっても、ここはやはり迂回的な接近として、白鳥神社の所在の追求から始めねばなるまい。そして同時に、じっさいの白鳥の飛翔する地名（鳥越や鳥井原など）をも地理のうえで押えてゆかねばなるまいと思う。それらの分布を明らかにしていかなければ、ただ別府だけの地点（位置）をみるだけでは、前進することが出来ないからである。

それが不幸なことに、タタラ・鍛冶の地名と同様に、こちらもまた『地名辞典』からは殆んど検出されない。カジ文化が、明治以後の生産体系からその地名が消えたのは致し方ないにしても、「鳥」のことまでも何故に消えたのであろうか。それを歎くよりまえに、各地の『市誌』・『町誌』などに記された古い小字名を見るより致し方がない。たゞ手許にあるものでは間にあわないのが実情なのである。―これを目的とする論文ではないのでお宥しを乞いたい―

さて、出雲地方では、金屋子神が白サギに乗ってやってきた、とされている（『鉄山秘書』）。大分地方では、主に八幡大神が鍛冶の神として活動する。鷹になり鳩になるけれども、白サギのことは、大分川「曲」の若宮八幡にそれとして知られるくらいである。

じつは『豊後風土記』のなかにみえる二つの白鳥のことが、正反対のことを伝えている。

総記では、北から飛来した白鳥が、餅となり、芋の花となって、「豊国」の名の由来にまで昇華した。

速見郡田野の条では、百姓が稲の餅を的にしたために白鳥となって南に飛び去り、衰滅した、という。

よその地方ならいざ知らず、同じ「豊国」のなかで、まったく正反対のことが記されているのは、何故か。

『山城国』（風土記・逸文）では、速見郡と同じこと

を記してあっても、的にされた餅は、白鳥となって山の峰に飛び翔けり、そこでイネがなり生いたので、伊奈利の社名としたという。これが、「餅の的」→「白鳥」の本来の姿（原型）だろうと思われる。

それがなぜに、豊国で二つの白鳥物語が、それも正反対のことが記されたのか。田野が速見郡でなくてじつは玖珠郡であろうと、速見郡の西（由布院西のユムタ高原か？）の地であろうと、今はそれは問題としない。正反対の内容が、同じ豊国内に記されていることを、どう解したらよいのか、と問いたいのである。

白鳥が、本来は稲作の文化をではなく、鍛冶の文化を示すものだとしたら、どうなるのであろうか。

風の神が、本来カジの業にとって重要なものであるのに、稲作にとっては、逆に台風の無事を祈る神となる。風を吹かす神が、風をとめる神と変わる（祖母山の神）ことを考えると、白鳥のことも解けるのではないか。豊国の由来とされた白鳥は、カジの神である。餅の的から白鳥になって百姓の衰滅した話は、のちに稲作中心の民俗信仰に変形したものではないのだろうか。

同じ『風土記』のなかに、正反対のことが記されていることを、右のように解したい。

そして、もう一つは、さきのストロースの神話論のことがある。カギの一つは、サト芋を朝鮮語を介することで、豊国が鉱工業の地となり『書紀』と『風土記』とが、表裏の一体となって、天皇のカリスマ（超人）性を顕彰することになる。これは同時に、中臣氏の忠節ぶりを、手をかえてクリ返スことで、功業を誇示することになる。神武紀・景行紀・さらに風土記での（幻の）中臣村の白鳥。そう解することで疑問がとける。

クリ返シ→信号化→社会化＝正当性の獲得。これは人類学での成果として説得力をもつだろう。コトワザにも〝二度は偶然、三度は必然〟と云っている。クリ返シすることで、人を信じこませることになる。

右のことが、否、それであればこそ、田野の白鳥の話によって、「豊国」の由来話がますます光彩を放つことになると言えよう。書紀・風土記の景行物語には、そういう政治的な臭いがプンプンする。ストロースの言葉がはっきり理解できるが、この問題はこれでやめておく。

別府と、周辺の（県内における）白鳥神社の所在と、じっさいの白鳥の飛ぶ土地とを、いちおう表図に記してカジの問題をさきに進めることにしたい。

白鳥神社の一覧表ならびに分布図は、『大分の神々』（高原三郎）と、『福岡県神社誌』と各地方誌に基づいて作ってみた。これによってみると、神社の位置は、まず豊前の海岸平野から国東半島をまわるものと、下毛・宇佐の山手を別府につながるものとがある。そして他は山間部を東南行して津久見に至る線がひけそうである。大分川の中下流に集中してみられるのは、豊後の国府の所在（大分市上野の南）にひっぱられてのことであろうと思われる。

豊後の国府と白鳥神社の集中とには、肯づける。

そうだとしたら、それならば何故に、豊前の国府近くに白鳥神社の集中がみられないのだろうか。

『豊後風土記』の総記に、白鳥が飛来し、それが餅となり、さらに冬に里芋の花が咲くことから「豊国」の名を天皇から賜わった、とされるほど豊国である。それなのに、ナゼ、白鳥神社が集中していないのか。

ひるがえって『古事記』の国生み神話にみえる九州四面のうちの「豊日別」のことがあり、豊日別社の存在をさきの『福岡県神社誌』から抽出すると、これはまた驚いたことに、京都郡十社、田川郡八社、企救郡四社、北九州市七社、築上郡三社とあり、中津・下毛郡七社、宇佐郡市三社、日田市四社とともに、豊前の国府の周辺は豊日別社が集中している。大分には無い。

それにしても、この両者の相違は、どのように解したら良いのか。あまりにも際立った対照である。これまで日本古代史のなかで、また大分県の歴史で、とり上げられていないが、今後これを解決する必要があろう。

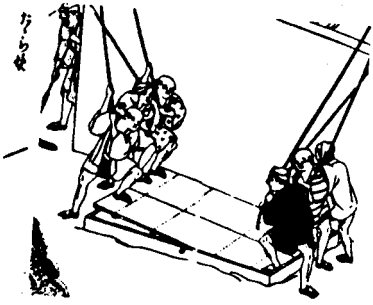
レビィ＝ストロースが、神話・物語りと、政治的イデオロギーとの類似を比較した説明が、いたいほど胸にひびいてくるが、いずれ御高教を得たい。

つぎに、白鳥神社と関連しての、じっさいの白鳥（ツルや白サギなど）の飛来を、地名のなかで追ってみたいと思う。タタラやカジとも関連ありそうに思えるのは、両者が、ともに「風」と「水」とにつよく結ばれているからだろうと思う。それほど単純ではないだろうけれど

豊前・福岡県の分（福岡県神社誌）

御祖神社（小倉市　足原）
高知神社（仝　　堀越）
小鳥神社（行橋市　大谷）
菅原神社（豊津町　節丸）
白鳥神社（田川市　猪国）
仝　　（仝　　伊田）
古宮八幡宮（香春町採銅所）
七所神社（豊前市　岩屋）
大楠神社（築城町　本庄）

◎白鳥神社合計　37
大分県　28
豊前・福岡県 9



白鳥神社一覧表

白鳥神社（本耶馬渓町　東谷）
鉾神社（山国町　中摩）
白鳥社（　　仝　宇曽）
鉾神社（院内町　高並）
森神社（安心院町　森）
乙咩神社（宇佐市　上乙女）
白鳥神社（豊後高田市　小田原）
若宮八幡社（太田町　永松）
浮島八幡社（日出町　真那井）
八幡竈門神社（別府市　内竈）
白鳥神社（大分市　千歳）
矢平神社（野津原町　太田）
白鳥神社（　　仝　入蔵宇曽）
熊野神社（大分市　宮崎）
七所神社（　　仝　賀来、中尾）
五所神社（　　仝　稙田、野田）
皇子神社（挾間町　無田、八幡）
天満神社（　　仝　向原）
山神社（庄内町　北大津留）
高岡社（　　仝　高田）
平野社（大分市　種具）
天満社（津久見市　千怒）
白鳥社（野津町　川登、白岩）
平野神社（三重町　百枝向野）
天満社（朝地町　錦田、俵積）
宮処野神社（久住町　都野、仏原）
白鳥神社（九重町　飯田、田野）
朝日長者の勧請という
白鳥神社（玖珠町　森）

素人考えとして、ともかく、「鳥」の飛翔のあとを追っかけてみようとおもう。

別府には、日出の豊岡から南下しているようである。

八月始め、大分大・教育の『宇佐地域』研究のために宇佐・駅館川西の乙女社付近を調べているときのこと、ちょうど白鳥が舞いおり、飛び交っているのを見て、つい「白鳥だ」と喜んだら、「白サギですよ、この付近は多いんですよ」と笑われたが、やはり嬉しかった。

こんなに白鳥が乱舞するのは、テレビでは見ていても実際に自分の目でみて、やはりうれしかったのだ。

そして此所から東に、宇佐宮の北にあたる高森には、「鶴の宮」があり、さらに東の鶴田新田には、「丹頂・白鳥・真名鶴」という地名が並んでもいる。

山国川岸の西から、中津・宇佐の海岸平野を東に飛来し、さらに西国東の真玉川口近く「鳥越」の地名があって、それより国東半島をまわって南下し、日出町、豊岡から別府へと南下してくるさまが、各地の「鳥」のつく地名をむすぶことで理解できる。

一方では、鶴田新田から川ぞいに南下する道もあるよ

豊前・豊後

白鳥神社・「鳥越」地名地図

○　白鳥神社

×　「鳥越」地名

うで、立石・下から、さらに南にと、「鳥越」「鳥井原」などの地名がみえるので、鹿鳴越（カナゴエ）の峠と、鳥屋岳（トヤ）とを過ぎる道もあるのだろうか。そして付近にはウト、ホキ、水落シがある。また小武には、タタラと隠山（カクレヤマ）があって別府の浜脇をしのばせる。立石・下の錨（イカリ）、豊岡の猪狩谷と曲木とのカリも、朝鮮語の Kui（銅）の音写である。

これが別府から大分川口にまでつづいている、と考えたら良いのではなかろうか。すくなくとも今の私には、そう考えたい気持である。

白鳥の南下は、別府市に入って、山手のほうで雨堤の上に「鳥の台」の地が、明礬に「トビの湯」が、さらに鶴見の山手に「鶴の台」「ツル山」があり、南立石では「鳥の湯」があって、白鳥が山ふところをずっと南下しているのが分る。海岸部のほうでは、内竈門八幡に「白鳥社」が合祀され、近くに「鳥越」の地がある。亀川には「鳥井の元」が、南石垣には「鶴見原」がある。

以上、『別府市誌』昭和六〇年刊の「小字地名表」と付録の「小字図」とを参照しながら記してみた。

白鳥の山の手の道が「タタラ」の地名に、海岸の道が「鍛冶」（また梶など）の地名とダブってくるのを、はらいのけるのは困難である。ともに風と水とに関わる。地図でみた山国川の八面山西南（青の洞門の東）の鳥越から、安心院町妻垣の南の鳥越、そして別府市浜脇南の鳥越峠とが、その中間はどうなっているのかを『町誌』でみたところ、安心院は、駅館川を宇佐から南にさかのぼり、鳥越をさらに南に川ぞいにさかのぼって、内河野から元という地に、鳥井原および鳥越があった。さらに南下して立石山をかすめて、由布院盆地の川上と中川とに鳥越の地名がある。ここからは大分川にそって、庄内から挟間にと飛ぶように思われる。安心院から別府に東行する鳥の道は、地名からは出てこない。これはちょっと予想外であった。

別府には、北から豊岡の鳥越をこして南下し、山手と海岸部を二手に分れて南下するものであろう—あとは専門家にたずねて確かめたいと思う—。

直接に「白鳥とカジヤ」が関連するのではなくても、「風と水と」を利用しての両者の存在が、古代から歴史

時代に、民衆の知恵（生活の文化）として、こういうことを生み出したのだと思われる。

四　むすび

以上、いろいろと述べてきたが、本稿もまた、結局はなんら結論の出せないままに終始した。

言葉の生活・文化としての鍛冶（カジ）をさぐって、それが、どういった変容をとげたかを明らかにしたかったのであったが―。

鍛冶文化の、民俗ないし考古的な書物は、相かわらず次ぎつぎと出されている。読む限りにおいては、どれも苦心し、面白いと思う。たとえば、「鬼」（オニ）とか「蛇」（ヘビ）のことなども―それを地元で、訪ねて聞いても、なかなかに明らかにはならないのが実情である。地名があってさえ、左様である。へたをすれば（上手をすれば、と言うべきか）、誘導尋問になってしまう場合がある。だから正反対のことが記されてもいる。社会の変化、そして物知りの老齢者のいなくなる度合いもスピード化しているのが実情である。

この点では、この本稿は、なによりもペーパー作業が主であることが、実り（ミノリ）すくない最大の理由かと反省する。そういう意味ではどこまでも、問題を提起したにすぎない一文だ、として宥して頂きたい。

明治十五年の「各町村　字小名取調書」によってみても、すでに全国的に地名の変更はすさまじいこと、そしてとくに、カジ（鍛冶）のような近代資本主義の洗礼をあびた文化では、その変容ぶりは大きいことがはっきりと知られる。

『地名辞典』や『地誌資料』も、それを証している。各地の『市誌』や『町誌』が、巻末に、「大字別の小名表」を作って、古い地名を明らかにしてくれていることは、何よりもうれしいことである。

右の二つの地名表を比べてみることで、タタラ・カジなどに関連する地名が、実に見事に消失していることを知るのである。

そこで『別府市誌』に記された古い小名の断片から、これを関連的な配列表に作って、構造的な復元図を画き

だせないだろうか、と考えてみた。

宇佐平野では、鍛冶屋のほかに「金屋」（カナヤ）の地名が目についたこと。鉄のカジヤ、銅のカナヤという対照が浮んだ。それだけでなく、加賀（カガ）の地名、またイカリと、マガリとの、「カリ」（本来は銅の義、のちカネ、金属一般をさすようになる）の地名が目につく。遠賀川の香春鉱山（伊加利・勾金の地名あり）との結び付きを示す八幡文化の姿が明かになってきたが、これは速見・国東地方の、いわゆる六郷満山文化の理解に手助けになりそうであると知った。

山香・立石から日出・豊岡にとイカリ・マガリがあり、さらに別府にも「カリ」があることを知った。

つぎに「金屋子神は白サギにのってやってくる」という出雲伝承が、同時に「白鳥伝説」を持つ「豊国」とも関連しそうだと考えて、白鳥神社と、鳥のつく地名とを表とし図として、追っかけてみた。白鳥神社は別府にはただ一つしかないが、鳥の地名は数多くみられるから、これは役に立つだろうと思った。

幸いに、「風」と「水」との結びつきが、鳥の飛翔とタタラ・カジの所在とに、ともに関連しそうだと分ったことは、大きな成果であった。

と同時に、『豊後風土記』の「白鳥」記事に、豊かな吉兆と、百姓の衰亡という、正反対の二つの文が豊国のうちに存することの意味はなにか。

また、豊後国府の周辺に白鳥神社が集中するのに対して、白鳥物語の本元である豊前国府の地方には、豊日別社が集中しているという対照、の意味も考えるべきことを悟った。

どちらも、問題の提起に終ったが、別府での「鍛冶の文化」の追求が、次ぎからつぎと連想を生んで、迂回的な接近の方法が思わぬ問題をよんでしまったのである。

金属文化、鍛冶文化が、世界史的な問題であるだけに、つい時空をこえて、別府から、日本の古代史にまで飛躍してしまった。ご諒恕を得たいと希うとともに、御高教をもお願いして、筆をおく。